

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 29 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21401029

研究課題名（和文） 古代エジプト王朝衰退期における交換・交易活動に関する考古学・  
銘辞学的研究研究課題名（英文） Archaeological and Epigraphical Studies on the Exchange and Commerce  
in the Wane of the Ancient Egyptian Dynasties.

研究代表者

川西 宏幸（KAWANISHI HIROYUKI）

筑波大学・名誉教授

研究者番号：70132800

研究成果の概要（和文）：古代エジプトで外来系土器が増加するのは第 20 王朝からであり、第 18・19 王朝で主流をなしたミケーネ系をはるかに凌ぐ量がフェニキアからもたらされ、一部は模倣されたことが判明した。また、アコリス遺跡の発掘によって、第 20 王朝から第 3 中間期における地方社会の実態と交易の殷賑が立証された。すなわち、王朝の衰微と西アジアにおける強国不在状態が、地方社会の自立を促し、交易を隆盛に導いたという、文献史学が語りえなかった衰亡期研究の新たなパラダイムに逢着した点に、本研究の成果がある。

研究成果の概要（英文）：It was illuminated that the Phoenician pottery increased from the 20<sup>th</sup> Dynasty and came to outnumber the Mycenaean examples which had formed the main current among the foreign pottery in the 18<sup>th</sup> and 19<sup>th</sup> Dynasties. Furthermore, the various fruits through our excavation in the local city Akoris tell the actual condition of the local society and the prosperity of the commerce from the 20<sup>th</sup> Dynasty to the Third Intermediate Period. Thus, it was concluded that the decline of the Egyptian dynastic power, together with the absence of leading kingdoms from the West Asia to the Aegean Sea, steered the local society to independence and commercial prosperity. This is the new paradigm of the study on the decline age.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	3,300,000	990,000	4,290,000
年度			
年度			
総計	10,000,000	3,000,000	13,000,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：エジプト、アコリス、第 3 中間期、衰退、交易、東地中海、フェニキア、地方

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 新王国時代末の第 20 王朝期からエジプトは政治・経済的に衰退に向かい、前一千年紀の状況は「折れた葦」と形容された。王朝

史としてみれば、確かにこの形容は的を逸していないのであるが、しかし、2002 年以降続いていたアコリス遺跡の調査結果が、新たな時代像を紡ぎ出しはじめていた。

(2) 新王国時代末のナイル流域について、前1170—1100年に訪れた増水不良によって農耕生産が大打撃を蒙って穀物価格が暴騰し、この状態が前950年頃の増水回復まで続いたという。K.ブッチャー (Butzer) が1995年に公表したこの水位変動説は、新王国時代末～第3中間期初のエジプト社会が苦境にあったことを告げていた。

(3) エジプトにおける考古学調査は、学的創始期の19世紀以来、神殿や墓に主力を傾注してきた長い伝統がある。この伝統は今も変わらないが、それでも1980年代から積極的に集落研究に取りくむようになったことが、新たな動向として注目された。西アジア方面の調査は集落址中心であったから、研究上のエジプトのガラパゴス状態を脱しようとする動きが始まっていたわけである。

(4) しかしそれでも問題があった。集落址調査の対象が、王都、準王都、州都級の大型都市遺跡に集中していたことである。西アジアのテル (遺丘) と違って広大な面積を擁するそれらの都市は、政治上の要所であるがゆえに、庶民社会の実相を語らせる資料にはなりにくかった。

(5) 集落研究に長じていた西アジア考古学でさえ、庶民社会の実態に研究の触針を向けるようになったのは、20世紀末のことである。この西アジアでの新潮流は、エジプト集落研究の赴くべき方向を指し示していた。

(6) エジプトと外方世界との通交研究は、文献史学が主導し、器物によって語らせる手法は一部にとどまっていた。

## 2. 研究の目的

王朝衰退期とはどのような社会であり、なぜこの衰退期に交換・交易活動が盛行をみたのか。これが本研究が掲げた当初以来の課題である。すなわち、当時の社会の実態を復原し、交換・交易活動を促した要因を解明することを目的とした。

## 3. 研究の方法

(1) 王朝の中心地から隔たり集落の中心からも外れた地域を対象として、発掘調査を実施した。王朝衰微期における一般庶民層の社会生活の実態を復原しようと考えたからである。それとともに、時代的に併行する新王国時代～第3中間期の集落址調査例を既存資料のなかから検索して、実態復原に役立てた。

(2) この地区出土の外来系土器によって基礎資料を集積していた交換・交易活動につい

て、新たな発掘で資料の充実をはかるとともに、ナイル流域における外来系土器の出土例、ならびにエジプト系器物の外方への伝播例を集成することによって、その内容を深化させた。

## 4. 研究成果

(1) 出土建造物について、新王国時代末期にこのアコリス南地区が利用された当初は、一種の要砦あるいは見張り所として機能していたことが知られた。10 km余り南のシュラファという小集落址で同時代の要砦址を確認し、南地区から眺望しうる南端にこれが位置する点を考慮すると、軍事上のネットワークで両者は結ばれていたとみて誤りない。このネットワークが機能した新王国時代末という、「海の民」やリビア人の侵寇を被り、同時に、王墓の盗掘など国内秩序の弛緩を伝える事件が発生した頃である。ネットワークの構築は情勢の悪化を回復しようとした王朝の対応策のひとつであろうが、王朝の中心地とも外敵の侵寇地とも隔たる中エジプトの一郭にまで策を講じていたことは、情勢の深刻さを伝える新たな知見として特筆される。

軍事上のネットワークはほどなくその用を失って要砦は廃絶し、かわって庶民による生業活動が横溢するようになったが、治安には不安を抱えていたようである。出土した家屋はすべて、街路ではなく袋小路のような見通せない個所に、入り口を設けてあったことから、それが察せられる。ところが、街路と家屋とで土砂の堆積状態を較べると、家屋内は日乾レンガや土器などの生活滓が多数混入して雑然としているのに対して、街路は生活滓を欠き、家畜の飼料や糞を含む整然とした水平層を形成していた。これは家屋が私有され、街路が生活滓の侵入を排除する公共的管理のもとにあったことを物語っている。

外敵の侵寇と秩序の弛緩が社会的混迷をもとらせたという既存の衰退史観は、この点で再考を余儀なくされるにちがいない。

また、ナイル流域における新興国時代末～第3中間期の集落址を検索すると、もとより我われのアコリス調査と同等の分析精度は期待できないけれども、南端のエレファンティネからカンティール、タニスなどの位置する北方デルタに至るまで、多くの例が確認される。近隣のエル・ヒバーでは集落に外壁さえ構築している。これらの集成例が示しているように、王朝の衰退期に集落形成の衰微した形跡はみとめられない。西アジア、東地中海・エーゲ海方面で集落形成の途絶がはなはだしいことを考えあわせると、ナイル流域におけるこの存続ぶりはきわだってみえるのである。交換・交易の隆盛要因を究明するうえで、これは重要な意味をもつ。

(2) 発掘調査によって存続が立証された業種として、農業、牧畜、漁業があり、さらに、農牧に依拠した紡織、皮革業が、高熱を利用したガラス・ファイアンス製品、銅製品、土器作りなどがあげられる。また、農牧にも高熱利用にも属さない例として、宝貝製装身具、木工品、石製品の製作がある。これらの多様な業種のうちで交換、交易にかかわる例を抽出していくと、原素材を他地に仰いだ例として、ガラス・ファイアンス製品、銅製品、宝貝製装身具、一部の木工品の制作があげられる。これらのなかで高熱利用品の製作は生産地の規模などからみて、渡り工人による可能性が高い。宝貝は紅海から、一部の木工品はレバントから運ばれたものである。他方、産品が移出された例として、穀物栽培、皮革業があげられる。漁業が加わる可能性がある。ナイル産魚類が東地中海方面へ移出されたことがすでに立証されており、アコリスもこの移出に参画していたことを窺わせる証左があがっているからである。

ナイルの増水不良が生業の停滞を招いたとする見解は、このように活発な生業活動の存在によって撤回を求められるであろう。

(3) 発掘地出土の外来系土器について検討を重ねた結果、大半を占めるアンフォラ及び巡礼壺の故地は、現在のレバノンから北イスラエルにまたがるフェニキア地域であること、年代は新王国時代末～第3中間期末にあたる前二千年紀後葉～前一千紀前葉の鉄器時代初期であることが、現地へ赴いた資料検索によって動かぬところとなった。なお、年代、故地ともに判明しなかった例が若干残った。今後の検討課題ではあるが、消去法でいうと、年代は発掘地における集落存続期間内で、故地はキプロス・フェニキア系として一括にされている土器群に類品があるので東地中海域を出ないと推測される。

エジプト出土の外来系土器は、エーゲ海系とキプロス系とが第18・第19王朝期で主役を占め、例のほとんどが王都や準王都の近隣から出土していた。アコリスのような一般集落のこの時期にあたる調査例が乏しい点に、その原因の一端があることは疑いないが、それでも、王朝の中心地に例が集中することは、テル・エル・アマルナにおける多数のエーゲ海系土器の出土、キプロス系土器のエジプトでの集成結果が示している通りであると思う。ところが、メルエンプタハ～ラムセス3世期における「海の民」の侵寇の頃、すなわち新王国時代末に変化が訪れた。特徴ある形態のアンフォラと巡礼壺とによって代表されるフェニキア系土器が急激に増加し、しかも巡礼壺は模倣されて土器様式の欠かせない一部に加わるのである。

これにはエーゲ海・東地中海域、西アジア一帯の情勢変化が、深く関与している。「海の民」をはじめとする諸集団がこれらの地域の都市を襲って壊滅させ、あるいは集落形成を衰微の淵に沈ませた。ミケーネ、ヒッタイト、パレスティナの多くの都市やウガリトが命脈を絶たれ、キプロスや南メソポタミアでも集落形成が衰微した。これに対して、ピプロスやティルスなどフェニキア諸都市の災厄は軽く、キプロスでは大型都市が存続して衰微から回復した。かくして、交易の主役の座はエーゲ海域を去り、東地中海域へと移ったのである。

主役の座から降りたもうひとつは、王国であった。ミケーネ、エジプト、ヒッタイト、カッシートがそれぞれエーゲ海・東地中海域、西アジアを支配し、交易もまた王国主導であった前二千年紀後半の状況が暗転して、強国不在に陥った。これに乗じてフェニキアの交易活動はにわかに活発の度を加え、利によって動く自由交易が管理交易にとってかわった。このような交易体制上の変容がなければ、アコリスのような場末の中小都市に、かくも数多くの外来系土器がもたらされることはなかったであろう。

外来系土器の出土遺構を通覧すると、エレファンティネのような公的建造物があるもういっぽうで、アコリスの場合には一般住居である。最大150㎡、最少25㎡で、この際は居住者の階層差を表していると思われるが、いずれにせよ庶民層あるいは中間層として一括りにしうる階層の住居である。そうして、その規模の大小にかかわらず外来系土器が出土していることは、自由交易への移行を裏付けている。

(4) ナイル流域から外方へ搬出された例のひとつとして魚類があることは先に指摘したが、器物の例を集成した結果、次のような帰結に達した。すなわち、エジプトでフェニキア系土器が卓越するのと前後して、エジプト系器物の搬出例が急激に増加するとともに、搬出域が拡大してイタリア半島、サルディニア、イベリア半島などの西地中海域を含むようになる。この点が地中海域における交易上の変化として特筆される。他方、西アジア内陸部では、ニネヴェ出土のアスケト女神像が最遠例で、カルケミシュ出土のオシリス・イシス像は分布上の外縁に近い例である。末期王朝期に降る例の目立つ点が注意を引く。

第18・第19王朝期のファラオが、ヒッタイト、カッシートなどの王と兄弟と呼び合ったことはよく知られており、この関係に伴ってエジプト系器物が伴出されたことは疑いない。テーベの第18王朝期のケンアメン墓に描かれた交易図、シリアのカトナ王墓の副

葬品、ウル・ブルム沈没船の積荷などの資料が、外交を前提とした管理交易の実像を一端にせよ伝えており、したがって器物の分布域はいきおい外交関係樹立域にとどまっていた。ところが、自由交易への移行とともに始まった西地中海域への拡大は、利を求めた結果であった。そうして、フェニキアによる自由交易は、前9世紀にアッシリアの支配下に入っても衰えを見せなかったことが、エジプト系器物の搬出が止んでいないところから知られる。エジプトは末期王朝時代にアッシリアの侵攻を蒙り、さらにアケメネス朝ペルシアの支配を受けたが、西アジア内陸部のエジプト系器物は交易というよりもこれらの契機で搬出されたのであろう。

(5) 本研究の所期の目的に立ち帰ると、王朝衰退期とは、治安上の不安を抱えながら、地方社会が自律化し、庶民層による生業活動がきわめて活発化した時代であった。そうして、交換・交易が盛況を呈したのは、エジプト社会が活力を失わず、生存戦略としてフェニキアの自由交易に参画したことによる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 11 件)

- ① 内田杉彦、古代エジプトの「お守り」、明倫短期大学紀要、査読無、16 巻、2013、10-17
- ② 花坂哲、川西宏幸、辻村純代、王朝衰退期の都市—エジプト・アコリス遺跡の調査 2012—、第 20 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2012、90-94
- ③ 周藤芳幸、初期青銅器時代エーゲ海の瓦と社会—レルナの「瓦屋根の館」を中心として—、古代、査読有、129/130、2012、77-99
- ④ 川西宏幸、辻村純代、王朝衰退期の都市—エジプト・アコリス遺跡の調査 2010—、第 18 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2011、22-27
- ⑤ 内田杉彦、古代エジプトの「装い」、明倫短期大学紀要、査読有、14 巻 1 号、2011、9-17
- ⑥ 花坂哲、コブラ形土製品の製作技法とその機能：アコリス遺跡出土資料を中心として、西アジア考古学、査読有、12 号、2011、57-78
- ⑦ 川西宏幸、王朝衰退期の都市—エジプト・アコリス遺跡の調査 2009—、第 17 回西アジア発掘調査報告会報告集、査読無、2010、18-22
- ⑧ 内田杉彦、古代エジプト人と動物たち、明倫歯科保健技工雑誌、査読有、13 巻 1

号、2010、10-17

- ⑨ 津本英利、テル・マストゥーマ遺跡（シリア北西部）におけるアケメネス朝ペルシア時代—0 層出土遺物と遺構の性格について—、古代オリエント博物館紀要、査読有、29/30 巻、2010、51-64
- ⑩ 堀賀貴、中部エジプト、ナズラ・スサイン・アリ東採石場の操業期間、日本建築学会計画系論文集、査読有、74 巻 642 号、2009、1911-1919
- ⑪ 花坂哲、アコリス遺跡における「豊饒の民間信仰」—土製ヒト形小像から探る—、筑波大学先史学・考古学研究、査読有、20 号、2009、51-74

[学会発表] (計 3 件)

- ① 周藤芳幸、コノンの像—古典期アテネにおけるイメージと言説—、日本西洋古典学会、第 63 回大会、2012 年 6 月 3 日、龍谷大学
- ② 津本英利、アナトリアとその周辺における鉄器時代移行期に関する研究、中近東文化センター附属アナトリア考古学研究所第 22 回トルコ調査研究会、2012 年 12 月 24 日、武蔵野スイングホール
- ③ 花坂哲、古代エジプト地方集落における民衆の信仰—アコリス遺跡出土遺物を事例に—、日本西アジア考古学会大 15 回総・大会、2010 年 6 月 27 日、国士舘大学

[図書] (計 4 件)

- ① Kawanishi, H., Tsujimura, S. and Hanasaka, T. (eds.)、Akoris Archaeological Project, University of Tsukuba, Preliminary Report of Akoris 2011、2012、24
- ② Kawanishi, H., Tsujimura, S. and Hanasaka, T. (eds.)、Akoris Archaeological Project, University of Tsukuba, Preliminary Report of Akoris 2010、2011、24
- ③ Kawanishi, H., Tsujimura, S. and Hanasaka, T. (eds.)、Akoris Archaeological Project, University of Tsukuba, Preliminary Report of Akoris 2009、2010、24
- ④ 津本英利、他、山川出版、古代オリエントの世界、2009、111

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

川西 宏幸 (KAWANISHI HIROYUKI)  
筑波大学・名誉教授  
研究者番号：70132800

(2) 研究分担者

周藤 芳幸 (SUTO YOSHIYUKI)  
名古屋大学・大学院文学研究科・教授  
研究者番号：70252202

堀 賀貴 (HORI YOSHIKI)  
九州大学・大学院人間・環境学研究科 (研  
究院)・教授  
研究者番号：202994655

内田 杉彦 (UCHIDA SUGIHIKO)  
明倫短期大学・歯科技工士学科・准教授  
研究者番号：00211772

辻村 純代 (TSUJIMURA SUMIYO)  
国士舘大学・イラク古代文化研究所・共同  
研究員  
研究者番号：60183480

津本 英利 (TSUMOTO HIDETOSHI)  
古代オリエント博物館・研究部・研究員  
研究者番号：40553045

花坂 哲 (HANASAKA TETSU)  
筑波大学・大学院人文社会科学研究科・特  
任研究員  
研究者番号：70512870